

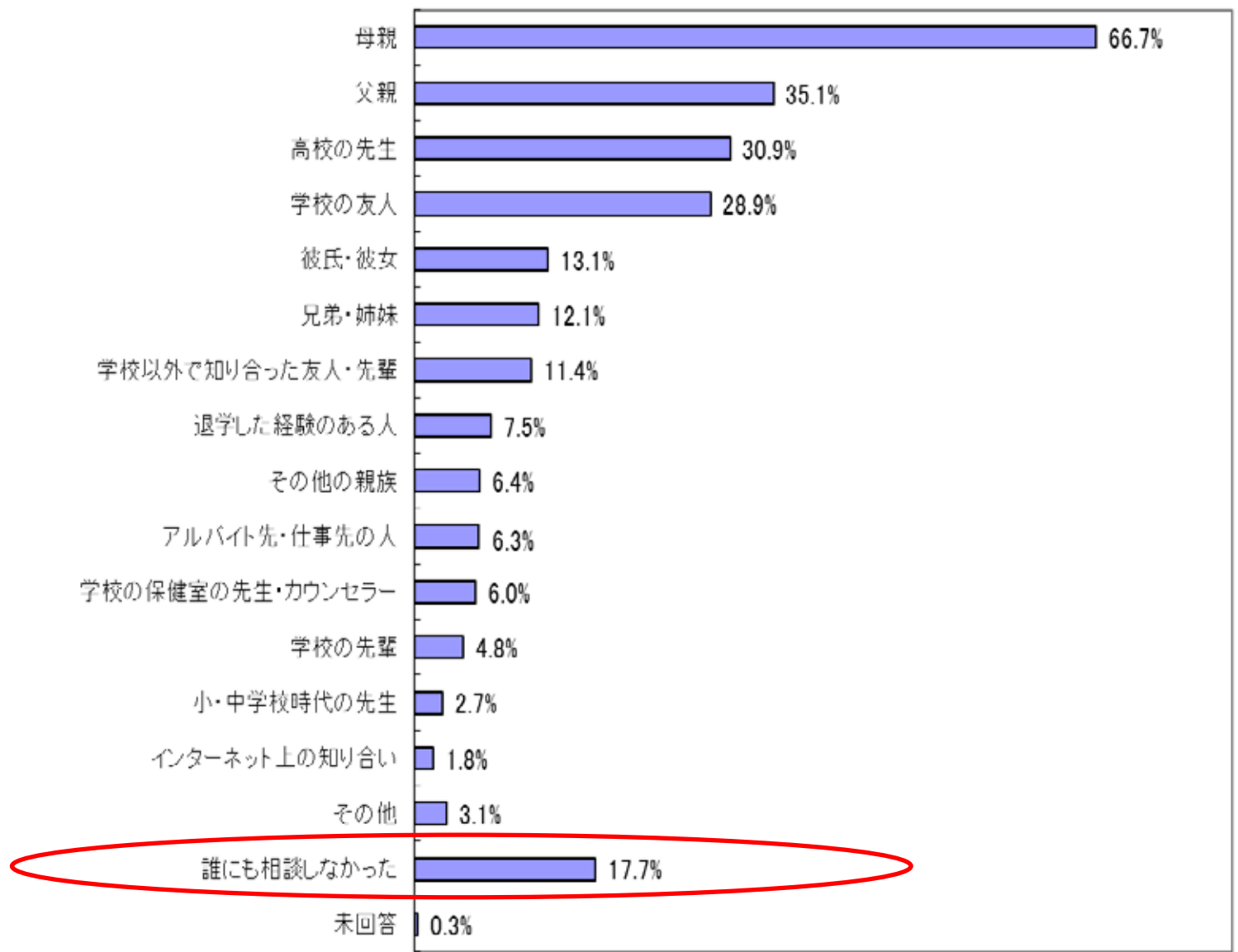
7 中退者をめぐる支援環境の疎外

- 家族の構成から見ても、父親同居率が6割弱、母親同居率が8割強であり、家庭の暮らし向きにゆとりがあるとする者も3割強に過ぎず、経済的文化的な階層問題の深刻さが読み取れた。
- 困難を抱える若者を家族が支える構図が崩れていくという懸念が生じる結果であった。退学を相談する人がいなかった若者も2割近くいる。
- そのため、フリースクールなど援助機関の利用も経済的に困難という声があがった。もちろん公的機関の理解は保護者も含めて乏しく、支援の場の選択にも、社会環境が影響を与えてしまう。

図表 高校タイプ別の家庭的背景

高校タイプ	有効回答数	父親同居率	母親同居率	父親大学在学率	母親大学在学率	暮らし向き (ゆとりがある)
全日制普通科・総合学科	159	78.3%	90.6%	32.1%	16.4%	31.5%
「進路多様校」	110	60.9%	80.9%	10.0%	3.6%	30.0%
エンカレッジスクール	31	63.3%	93.3%	23.1%	14.8%	37.9%
チャレンジスクール	108	52.3%	86.0%	37.5%	15.5%	33.9%
定時制・昼夜間	111	54.6%	84.3%	17.6%	12.4%	34.5%
定時制・学年制(夜間)	250	54.7%	86.8%	17.3%	11.0%	32.2%
職業学科	174	69.0%	82.2%	17.2%	6.3%	31.6%
通信制	39	44.7%	71.1%	28.6%	21.4%	38.5%
全体	988	59.6%	85.7%	23.9%	11.9%	33.1%

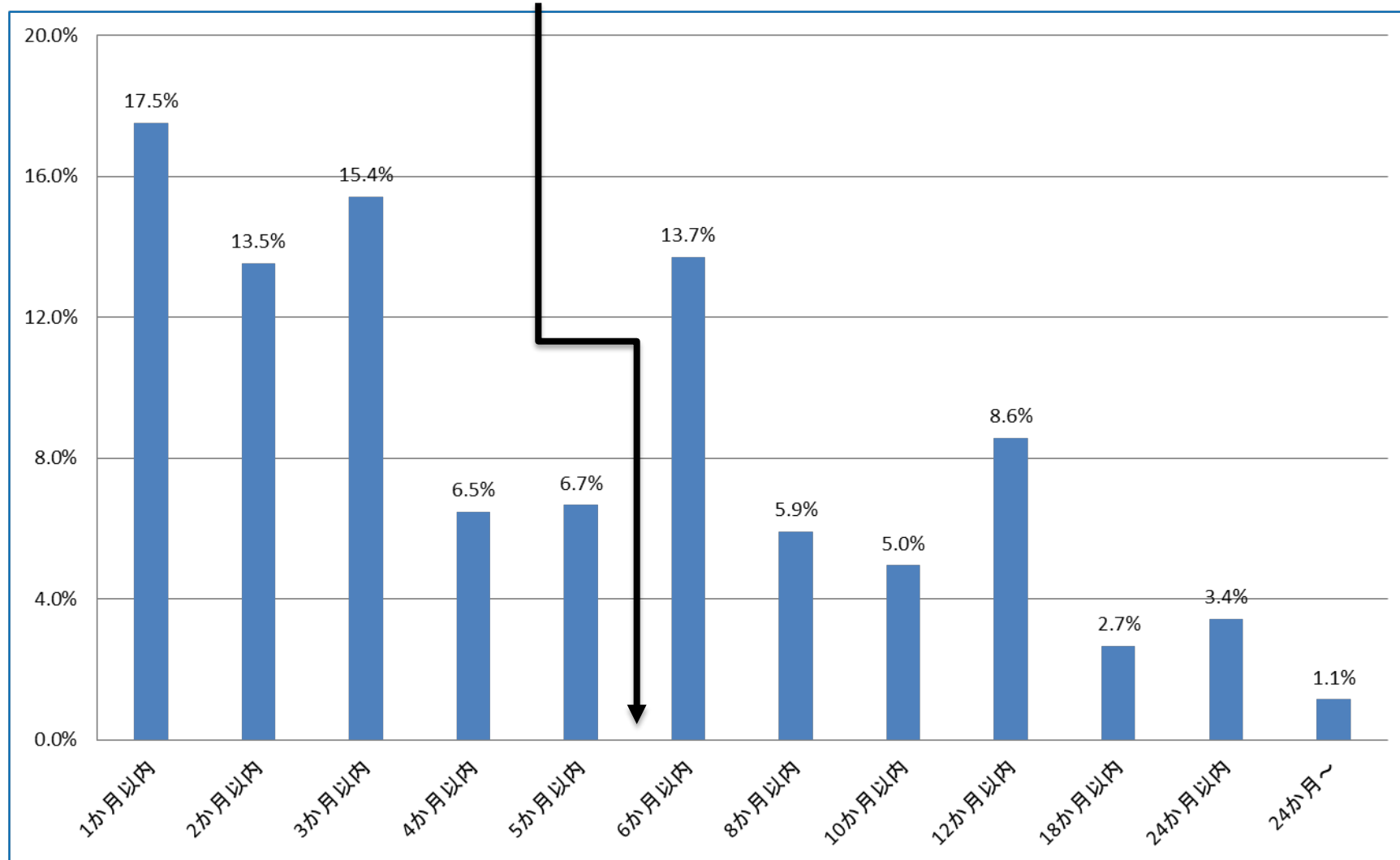
図表 退学時に相談した人



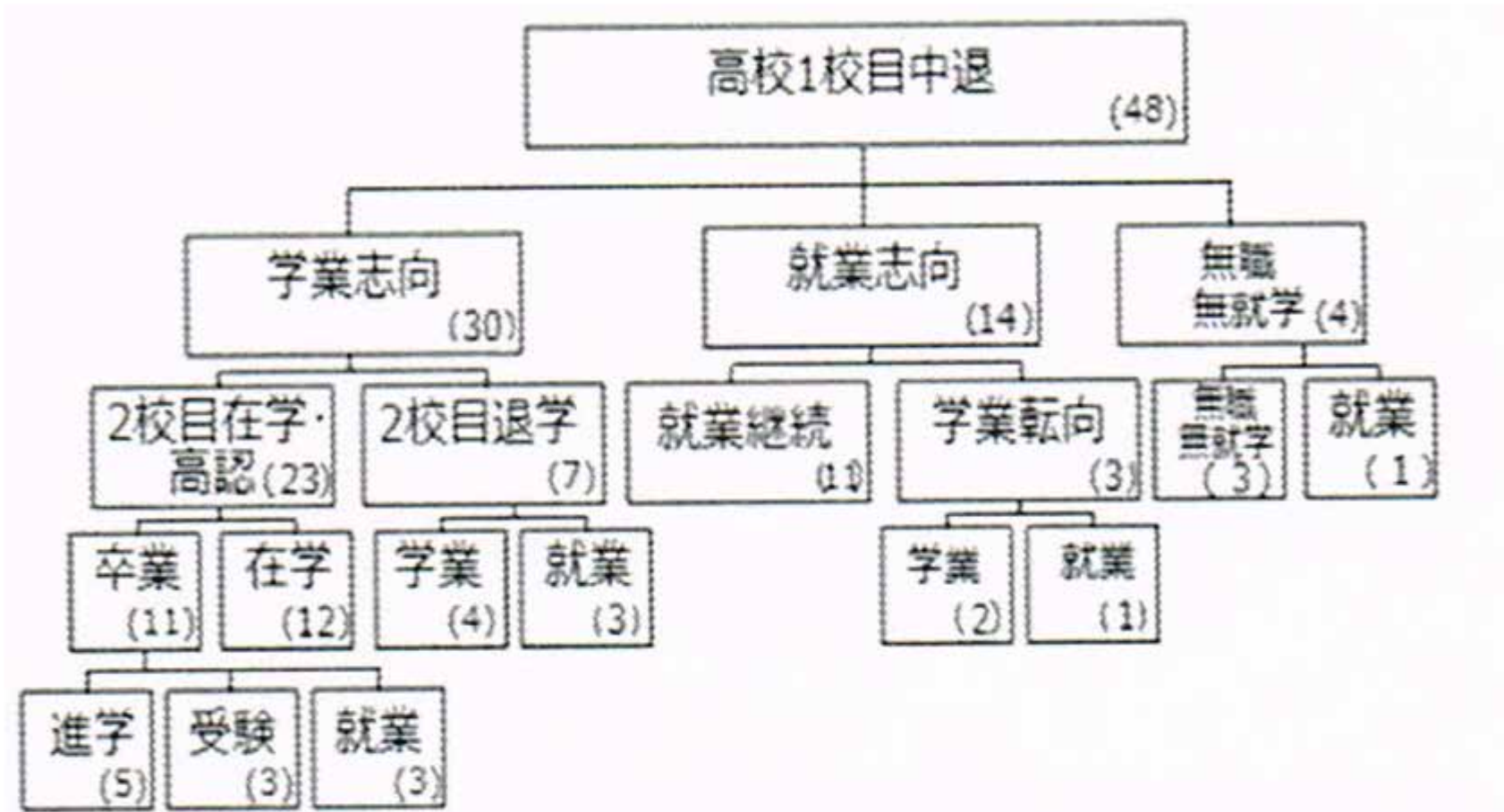
図表 退学後の進路タイプ別・退学後の利用機関・サービス(とても+まあの合計%)

	就業・学習 双方あり	就業のみ	学習のみ	双方なし
有効回答数	363	427	109	77
ハローワークやジョブカフェ	16.1%	16.5%	6.5%	14.3%
病院(心療内科など)や精神保健福祉センター	9.6%	4.5%	21.3%	16.9%
退学した高校	11.8%	2.4%	10.2%	3.9%
カウンセラーや心の相談機関	7.0%	2.4%	13.0%	6.5%
予備校、学習塾、サポート校	5.6%	0.5%	8.3%	1.3%
若者のための居場所・フリースペース	1.4%	1.4%	5.6%	3.9%
職業訓練支援センター	3.4%	0.2%	0.9%	1.3%
地域若者サポートステーション	0.8%	0.2%	3.7%	0.0%

図表 退学後、悩んではいたが「何もしなかった」 インターバル期間の長期化



図表 聞き取り者の退学後のジグザグなライフコース



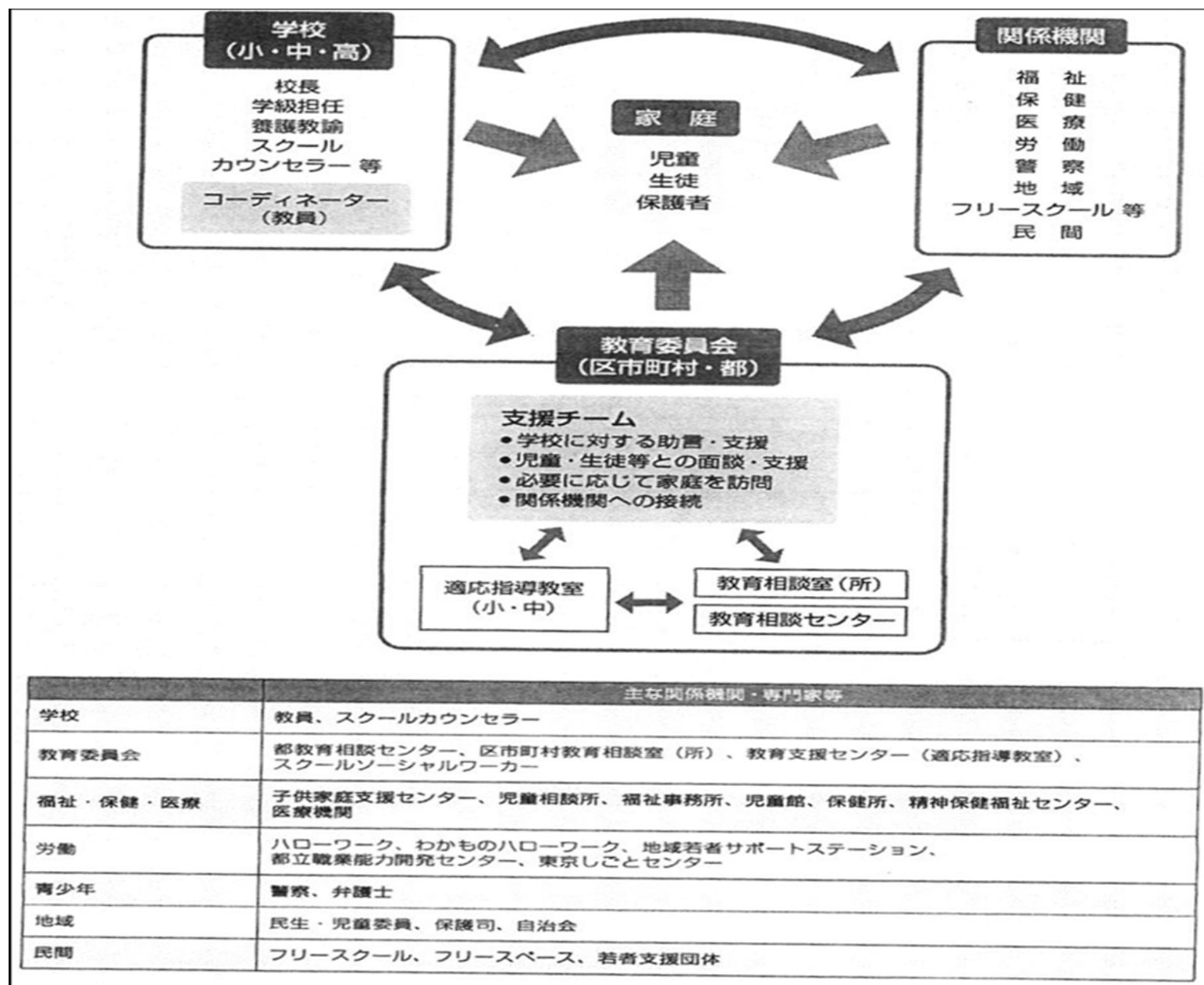
()内は該当者の人数

- 高校1校目を中退以降に進路の選択を幾度となく繰り返しながらジグザグなライフコースを歩いていく者が多い。中退を複数した経験者も多い。
- 学習志向の強い者は、教師の紹介などを通して次の再入学先を見つける場合が多い。
- 就業指向の強い者は中退後長い期間をおかず就労するが、厳しい職務環境を経て、再度学習指向(定時・通信制)に転ずる事例が多い。
- 男女で、無就業・無就学者の意味は異なり、女子は出産など家族形成に向かう場合も多い。
- 例えば、同じ高校中退した者といっても、問題の力点は多様である。いじめや対人不安など非社会的行動から医療機関やカウンセリングを必要とする者もいれば、非行や逸脱行動など反社会的行動から警察やハローワークでの援助を必要とする者もいる。中退後の進路についても、再就学を望む者と就労を望む者とは、必要な支援の場が異なる。

図表 今後求める支援(各項目への有効回答率)と学習・就業経験

	双方あり	就業のみ	学習のみ	双方なし
職業や資格取得の指導をしてくれる	85.6%	77.8%	87.9%	74.3%
大学や専門学校の授業料を無料にしてくれる	82.2%	70.6%	81.7%	65.8%
仕事に就くための相談やアドバイスをしてくれる	73.6%	64.0%	78.7%	74.3%
若者向けの公営の住宅を設置してくれる	71.7%	72.5%	62.0%	64.9%
世の中で役立つ知識や能力を高めるための教室を開いてくれる	66.9%	51.3%	78.0%	58.9%
再入学や高卒認定のための補習をしてくれる	65.1%	57.7%	61.1%	64.4%
将来のために自由に使えるお金を区役所や市役所などが提供してくれる	64.4%	67.7%	61.4%	63.0%
世の中のマナーやルールを学べる機会を提供してくれる	57.0%	49.4%	65.7%	56.0%
居場所やフリースペースを提供してくれる	49.8%	46.9%	68.5%	56.7%
人間関係を円滑にできるような講習をしてくれる	40.8%	34.8%	52.3%	56.0%

- 次の図は、不登校・中途退学者のために構成された支援ネットワークの事例である(東京都不登校・中途退学者対策委員会 2015)。この対処施策では、支援のまとめ役や懸け橋となる「教師のコーディネーター」が校内にいると同時に、教育委員会内部の「支援チーム」(スクールソーシャルワーカーなどを含む)が重要なワンストップ窓口としての役割を担っている。
- 指導困難な児童生徒個々の課題を正確にアセスメントし個別情報の特徴 = インテークを核としながら、学校—保護者—地域の関係機関相互間の連携(リファー先の確保)を促している。
= 地域ネットワーク組織化
- さまざまな社会参加・社会関係からの資源を獲得し、自らの問題の意味を見直し新たな生き方を発見する機会の拡大を促す



ネットワーク組織という考え方

- ネットワーク論の知見は、学校 (「閉じた組織」) がさまざまな外部の人々や組織とかがかわることで相互に変化し続けていることを教える。組織を単体として捉えず関係の束のなかにある プラットフォーム とみる必要。
- 指導実践は、関わり合う人々や組織が違いその中心となる人や組織が変わるだけで、あるいは入っているネットワークの課題設定の経緯が違うだけで変化してくる。
- そこには相互関係による 「創発特性」 が働いており、協働・連携の前提として、すでに社会的に埋め込まれているネットワークの特徴を知る必要がある。

ネットワーク組織として学校を位置づけなおすと、

- 第1には、一方的な命令系統ではなく、関係者相互のコミュニケーションやアドバイス、キャリア(経歴)などを大切にする水平的でフラットな結びつきを重視するようになる。
- 第2には、問題対処的に、指導課題の特徴に即して、それぞれの集団や組織の壁を越えて協働できるつながりをみつけるようになる。
- 第3に、ネットワークの力を通じて指導課題に応じた支援の資源や人材、情報を動員できると考えるようになる。
- 第4には、個別な学校の閉じた実践ではなく、ネットワークを伴う他校の実践との比較から、支援課題達成の現状を評価することができるようになること。
- 第5には、ネットワーキングという進行形の視点に立って、学校の自己組織的で柔軟な変化しつつある出来事を大事にみることができるようになること、などである。

8 教育困難高校卒業生の10年を調査する

- 「ハイリスクな生徒」は社会へ出てどうなっていくのか。10年間のパネル型事例調査の結果をみよう(⑨古賀2013)。
- 底辺高校の3年生在学時の秋から5回の聞き取り調査(2003、06、07、08、12年)を実施し、進路先とそれを取り巻く社会状況・家庭環境・対人関係の変化をつぶさに追いつけた。類似の乾ら(2013)の調査と異なり、底辺の若者のみを追っている。
- 昼の正規就業と夜のアルバイトの二重労働など、アンケートだけでは把握しきれないジグザグなライフコースの事実に肉薄し、トランジション(高校から社会への移行)の現実を把握しようと努めた。
- 調査結果から卒業生の就学・就業の状況を年次別に比較したものが表である。

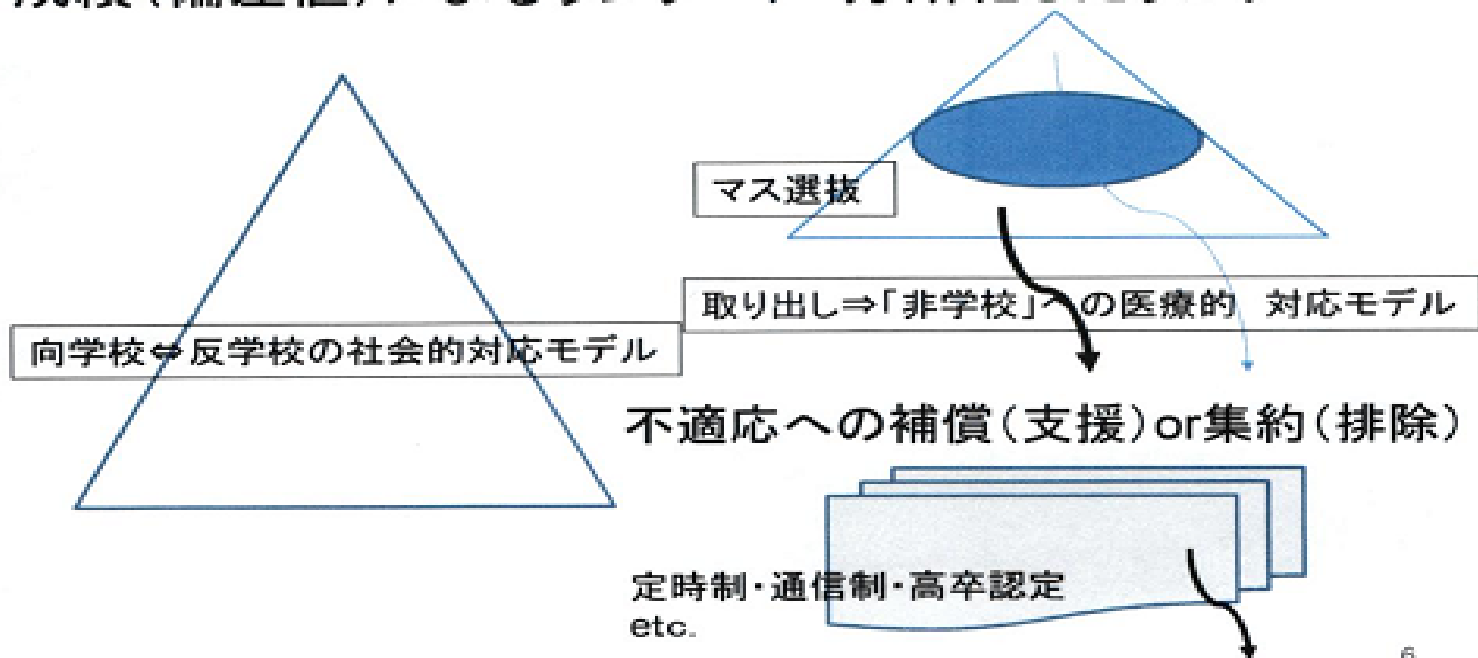
自己申告による東京・宮城2校の進路状況（04年と08年、12年）

		（％）	
		東京 A 校 (55名)	宮城 B 校 (31名)
卒業時・第1回調査の進路状況 <u>2004.03</u>	大学・短大	18.2	3.2
	専門学校	40.0	12.9
	正規就職	21.8	74.2
	フリーター・非正規	12.7	9.7
	進路未定・その他	7.2	0.0
		(30名)	(10名)
第4回追跡調査時の進路状況 <u>2008.11</u>	大学・短大	20.0	0.0
	専門学校	6.7	0.0
	正規就職	23.3	60.0
	フリーター・非正規	43.3	40.0
	その他	6.7	0.0
		(19名)	(9名)
第5回追跡調査時の進路状況 <u>2012.03</u>	大学・院	5.3	0.0
	専門学校・大学校	15.8	0.0
	正規就職	31.6	44.4
	フリーター・非正規	42.1	55.6
	その他（自営・主婦等）	5.3	0.0

教育モラトリアム指向(大学・専門学校)の強まり

高校の2重のトラッキング

成績(偏差値)によるランク → 分断化したランク



インタビュー対象者のキャリア変化の過程(聞き取り調査からの整理)

A校	対象者	学歴	婚姻(子)	現在の主な職業(正=自己申告による)	これまでの主なキャリア(→の右側が「過去」)	高校・成績(出欠)
1	男性A	高卒	有・子	飲料メーカー(正)	飲料メーカー(学校推薦)	D (D)
2	男性B	高卒	無	町工場工員(正)	生協・嘱託→自動車販売・正社員→アルバイト転々→石油会社・正社員(学校推薦)	B (C)
3	男性C	高卒	無	留学斡旋会社自営	米国・飲食業・店員→米国・語学学校、コミュニティカレッジ在学→女性スカウト業	D (D)
4	男性D	専門中退	無	職業能力開発センター在学	アルバイト転々→コンピューター関連専門学校	D (A)
5	男性E	専門卒	無	整体師	整体師・見習い→整体関連専門学校	C (A)
6	男性F	専門卒	有・子	郵便配達員	「ニート」→鉄道会社・正社員→音響関連専門学校	C (B)
7	男性G	専門・大卒	無	郵便配達員	アルバイト転々→工科大→コンピューター関連専	C (A)
8	男性H	大卒	無	大学院在学	ミニコミ誌編集・バイト→経営系大学	D (B)
9	女性I	専門卒	無	調理師(正)	保育園調理・栄養士→休職→栄養系専門学校	D (B)
10	女性J	専門卒	無	看護師	病院看護師→看護系専門学校	C (B)
11	女性K	専門卒	無	障害者施設職員(正)	個人経営の派遣介護・福祉会社→福祉系専門学校	B (A)
12	女性L	専門卒	無	学童保育臨時職員	学童保育臨職→保育系専門学校	B (A)
13	女性M	専門卒	無	風俗嬢	飲食店店員→栄養・調理系専門学校	B (A)
14	女性N	他専門卒	無	看護学校在学	ペットショップ店員→ペットトレーナー専門学校	B (A)
15	女性O	大卒	無	フリーター	アルバイト転々→臨床心理系大	C (C)

- いくつかの事例を分析してみると、具体的なトラブルとなる職場課題の存在とその解消が若者を襲ってきて、状況の中での対人関係に伴う「ソーシャルスキル」の具体的な体得が必要に感じられるという流れになっている。
- 社会環境、特に対人関係への能動的な関わりが困難に思えることによって、広く多様な他者に依存したり援助されたりすることで自分が生きられるという認識が持ちにくくなっていく。

B うん、なんて言うんですかね、なんかやっぱりその社会人的な常識とかマナーとか、そういうもの
かって、はっきり言って全然学ばないできたなと思うんですよ。

INT ああ、例えばどんな常識が一番？

B なんていうんですかね、名刺交換するときのタイミングだとか。

INT なるほど。

B ホント小さな事から言うとそういうのから。あとビール注いだりとか。

<D 君へのインタビュー>

INT = インタビュアー

D (就職の面接も)全部落ちました。……

INT どうしてだと思いますかね？

D 自分よりも他の人のほうがいろいろ「やる気」、そういうのがあった気がしますね。……

…… (略)……

INT それで、「したいこと」について、いつ結論が出るんだろう？

D いつ結論出るんでしょうね……もしくは、趣味の延長で、そこからどっか、なにかいい仕事が見つかる
ばいいなというのは、たまに、あり(ます)。そう、思いますけど。

INT うーん……

D まあ、そう世の中甘くないですし……

この会話で D 君が問題としているのは、就職の不合格がやる気を発信することの下手さによっているという解釈である。同時にそれは彼にとっての「甘くない世の中」や「趣味の対人関係との違い」を体現する出来事として発言されている。

9 非行少年の矯正教育と出院後の社会

- 当事者の若者の対人関係・不安の改善，仲間・家族・地域住民を巻き込んだ社会関係づくりの必要性は，非行少年の矯正教育の事例からも見出せる。
- 犯罪白書の資料(2012)をみると，非行の再犯の確率は，義父母を含む保護者の構成によって変化し，少年院への保護者の来所回数に反比例するという指摘がある。
- 公式統計でみると少年非行はこの10年間大幅に減少。凶悪犯の増加などの非行内容の変化はほとんどなく、近年オレオレ詐欺の摘発などもあるが、「非行少年の消滅」の時代(土井2003)に向かっている。

- 近年「いきなり型(キレる)非行」と呼ばれ、重篤な犯罪を何の前触れもなく行ってしまう普通の子の非行が存在するといわれる。これまで非行の経験がなく、さしたる動機も語れないのに非行を犯す。
- 脳科学的な発達障害への疑いも拡大するなかで、従来の非行キャリア(学習)論への疑念がますます広がっている。
- 非行少年はいまやキャリア形成がなされないほど稚拙化しているという主張がある(土井2010)。集団のリーダーシップが認めにくく、互いのつながりを維持しようとするノリで非行をしてしまう。
- 関係づくりのネタなので、万引きも凶悪犯罪も動機に大差がなくなる。非行少年の文化が共振的になり、統率力のある集団として機能しなくなっているという。

非行のステレオタイプ(80年代の事例)は いまやほとんどあてはまらない



図 10-3 非行少女像

- 重篤な非行少年と面談し改善指導する少年院のある法務教官は、「文句を言う少年は対処できるが、無気力で無反応な少年ほど難しい」とし、言葉の力が駆動しない事例の難しさを述べていた。
- ある入院中の非行少年は、非行行為を振り返りつつ、次のように語る(⑩古賀2012)。

「まだその時は、自分のことしか考えてなくて、一度ぐらいはいいやと思ってしまいました。自分だけがつらい思いしているのだからいいやと。そういう考えでした。」

- N少年が出院時に入院前の非行をした時の社会および入院からしばらくの悪い社会を引きずった時期は、対人関係に「問題を感じていなかった」とはっきり語っている。
- 彼はそれまで自身の対人関係を「非行の問題性の元」として繰り返し述べてきたが、最後にきて過去を回顧する彼の語りはそれまでと食い違っていた。院内で対人関係の重要性を感じ取る機会を持つことで、対人関係の評価や意味は逆転した。
- ある女子少年院では、育て直しプログラムとして、親子一緒に体験活動をさせる機会を用意しているという。上記のように「気づき」を伴う家族関係あるいは社会関係の改善 = 社会関係資源の獲得、が矯正教育を進める上でも重要である。